

Ælfric の『文法』を読む*

市川 誠

1. はじめに

‘Prolific’ と形容される Ælfric は、数多くのラテン語作品を英語へと翻訳した。 *Catholic Homilies First Series* の古英語版序文で Ælfric は翻訳を開始した理由を次のように述べている。

- (1) ac for ðan ðe ic geseah 7 gehyrde mycel gedwyld on manegum engliscum bocum. ðe ungelærede men ðurh heora bilewitnysse to micclum wisdome tealdon. 7 me ofhreow þt hí ne cuðon ne næfdon ða godspellican lare on heora gewritum. buton ðam mannum anum ðe þt leden cuðon. 7 buton þam bocum ðe ælfred cyning snoterlice awende of ledene on englisc.

(Clemoes, 174)

聖書の正統な解釈、とりわけ旧約聖書の霊的な意味を理解するために重要なことは、正しい文法知識に基づいて正確に読むという行為である。¹ 例えば、Ælfric が翻訳した『創世記』の序文にある記述を見よう。(2) で引用する記述は、創世記第 1 章第 26 節について論じたものである。

* 本稿は 2010 年 12 月 4 日に大阪学院大学で開催された第 26 回日本中世英語英文学会全国大会でのシンポジウム「アングロ・サクソンイングランドの『文法』と『翻訳』—ラテン語から自国語へ—」(司会・総論 山内一芳)で行った口頭発表原稿を修正したものである。筆者にシンポジウムのパネリストとして発表の機会を与えていただいた山内一芳教授に感謝の辞を申し上げます。

1. Ælfric, working out of Latin grammatical tradition, taught English grammar as a system of interpretation which allowed readers to interpret correctly - from a Christian stand- point - English texts. (Menzer, 638)

- (2) Eft <is> seo halige ðrynnys geswutelod on ðisre bec, swa swa is on ðam worde, ðe God cwæð: “Uton wyrcean mannan to ure anlicnyisse.” Mid ðam ðe he cwæð: “Uton wyrcean,” is seo ðrynnys gebicnod; mid ðam ðe he cwæð: “to ure anlicnyisse,” is seo so ðe annys geswutelod. He ne cwæð na menigfealdlice: “to urum anlicnyssum;” ac anfealdlice: “to ure anlicnyisse.”

(Crawford, 78 下線は筆者による)

ここで注意すべきことは、名詞 *anlicnyisse* は複数形ではなく単数形なので、父と子と聖霊は一体であると Ælfric が主張していることである。このような議論は、単数と複数の区別という grammatical number (文法的数) についての知識が読者になければ不可能だろう。同様の議論は、Ælfric が翻訳した Alcuin の *Sigewulfi Interrogationes* でも見受けられる。² (3) に挙げる *Catholic Homilies First Series* の Mid-Lent Sunday からの引用は、テキストを字面ではなく文法に基づいて理解することが重要であると Ælfric が認識し、それを読者に示唆しているという点で注目に値する。

- (3) oft gehwa gesihð fægere stafas awritene. þonne herað he ðone writere 7 þa stafas 7 nat hwæt hi mænað; Se ðe cann ðæra stafa gescead. he herað heora fægernysse. 7 ræt þa stafas. 7 understent hwæt hi gemænað; on oðre wisan we scawiað metinge. 7 on oðre wisan stafas. ne gæð na mare to metinge buton þt ðu hit geseo. 7 herige; Nis na genoh þt ðu stafas scawie. buton þu hi eac ræde. 7 þt andgit understande;

(Clemoes, 277 下線は筆者による)

正しい文法に基づいて書かれた英語を媒介としてキリスト教の正統な教

2. Forþi is 3ecweden uton wyrcean: þæt wære 3eswutelad þære hal3an þrynnesse weorc: on annysse; Seo (ha)li3e þrynnes is under3iten on þa worde . uton wyrcean . 7 seo so ðe annys is understanden on þa worde: to ure a(n)licnyisse? (MacLean, 18)

えを広めること。そのような信念は、Ælfric の写生字に対する願いからも伺い知ることができる。³ 西暦 990 年頃から開始したプロジェクトの一環として、2 つの *Catholic Homilies* を翻訳した後、Ælfric は Priscian の『文法の抜粋』を翻訳した。その古英語版序文で、Ælfric は翻訳の理由を、「文法は書物への理解を開く鍵であり、文法についての書物は、若い人がより大きな理解へ至るまで学芸の手解きとして役に立つから」と述べている。Ælfric にとって、文法は教養を理解するために重要な役割を果たすものであり、そして、彼の『聖者伝』(*Lives of the Saints*) で描かれる Chrysanthus のように、若い人が正しい文法に基づいた教養を学ぶことは、正しい信仰の基礎となるものであった。⁴ ラテン語を学び始めた若い人を念頭に置き、Ælfric は Priscian の『文法の抜粋』を翻訳した。彼の『文法』は中世で初めて自国語で書かれたラテン語文法書という点で文学史上重要な位置を占めると同時に、アングロ・サクソン・イングランドにおける「自国語の形成」という観点からも重要なテキストと見なすことができる。下で引用する『文法』の古英語版序文で述べているように、Ælfric はラテン語文法のみならず古英語文法の初歩としても機能するべく『文法』を書き上げたからである。

(4) ne cwe ðe ic nâ for ðî, þæt ðeos bôc mæge micclum tô lare fremjan, ac hêo byð swâ ðeah sum angyn tô ægðrum gereorde, gif hêo hwâm lîcað.

(Zupitza, 3 下線は筆者による)

Ælfric 以前、自国語の文法について体系的に記述した書物は存在しなかった。筆者が知る限り、Ælfric と同時代の Byrhtferth が唯一、*Manual* の第 2 章第 1 節で品詞論と修辞論について簡単に触れているだけである。⁵

3. Ic bidde nû on godes naman, gyf hwâ ðâs bôc âwritan wylle, þæt hê hi gerihte wel be ðære bysne; for ðan ðe ic nâh geweald, þeah hi hwâ tô wôge gebringe þurh lêase wriðeras, and hit bið ðonne his pleoh, nâ mîn. (Zupitza, 3)
4. Skeat, 378.
5. Baker and Lapidge, 88.

自国語で書かれたラテン語文法書であると同時に、結果としてアングロ・サクソン人の言語を記述する Ælfric の『文法』は、ラテン語に堪能でありながら説教などで英語を使用する聖職者や、英語で書かれた他のテキスト、例えば、説教集、聖者伝、聖書、規則書、年代記などにすでになじみのある読者に、母国語である英語の文法を認識させ、自国語観を形成する重要な契機を提供したことだろう。また、Ælfric の『文法』を読み、その内容を知るとは、当時の言語観から古英語を考察するという視座を私たち英語史研究者に提供する。先ほど、Ælfric は Priscian の『抜粋』を翻訳したと述べた。しかし、彼の『文法』は Priscian の単なる翻訳ではない。実際、Priscian の『抜粋』と Ælfric の『文法』を比較すると、Ælfric は『文法』の翻訳に先立って書き上げた 2 つの *Catholic Homilies* で実践したように、読者がそこで提示された概念を簡単に理解できるようにシンプルに再編集をしていることが分かる。本稿では、Law、Menzer、Porter などの先行研究に依拠し、Priscian の『抜粋』と Ælfric の『文法』の内容、Ælfric が翻訳の際に行った改変、そして読者に自国語の文法を認識させる語形変化表とその用例などを概観し、最後に Ælfric が『文法』を書き上げた意図を考察する。

2. Priscian の『抜粋』の内容

『文法』のラテン語版序文の冒頭で、Ælfric は「浅学である私 Ælfric は Priscian の『抜粋』を若い人のために英語に翻訳することに専念した」と述べている。⁶ Gneuss によれば、11 世紀のイングランドに存在した Priscian の『抜粋』の写本は 2 つある (*Handlist*)。1 つは Antwerp 写本であり、もう 1 つは Paris 写本である。Porter によれば、この 2 つの写本は Ælfric が『文法』を翻訳する際に使用したテキストに密接に関連したも

6. Ego Ælfricus, ut minus sapiens, has excerptiones de Prisciano minore uel maiore uobis puerulis tenellis ad uestram linguam transferre stadui, quatinus perlectis octo partibus Donati in isto libello potestis utramque linguam, uidelicet latinam et anglicam, uestrae teneritudini inserere interim, usque quo ad perfectiora perueniatis studia (Zupitza, 1)

のであり、Porter の Priscian のエディションは、主にパリ写本に基づいたものである。Porter のおかげで、今日、Priscian の『抜粋』と Ælfric の『文法』の比較が容易となった。表 1 は Priscian 『抜粋』の内容の構成を示したものである（表右欄の数字は Porter のエディションにおけるページを示す）。

表 1 Priscian の『抜粋』の内容

| | |
|---|---------|
| 1. 音韻論 (Speech Sound) | 44 |
| 2. 文字 (Letter) | 44-6 |
| 3. 品詞の序論 (Introduction to Part of Speech) | 58-60 |
| 4. 名詞 (Noun) | 60-158 |
| 5. 代名詞 (Pronoun) | 158-80 |
| 6. 動詞 (Verb) | 180-248 |
| 7. 副詞 (Adverb) | 248-66 |
| 8. 分詞 (Participle) | 266-78 |
| 9. 接続詞 (Conjunction) | 280-86 |
| 10. 前置詞 (Preposition) | 286-308 |
| 11. 間投詞 (Interjection) | 310 |
| 12. 数詞 (Names of the Numbers) | 310-8 |
| 13. 文法の下位部門 (Thirteen Divisions of the Grammar) | 318-324 |

Priscian の『抜粋』は、音とそれを表記する文字を説明する音韻論から始まる。音韻論の簡単な説明を終えると、品詞の説明に移る。品詞は名詞、代名詞、動詞、副詞、分詞、接続詞、前置詞、間投詞の 8 つに分類、記述される。『抜粋』では品詞を説明する際、一般的な定義を施したうえで、意味と形態の観点から詳細な説明が与えられている。例えば、『抜粋』は名詞を「品詞の一つであり、個々の項目に一般または個別の特性を割り当てるものである」と定義し、名詞についての説明を始めている。各品詞の説明を終えた後に、数詞と文法の下位部門の記述が来る。

3. Ælfric の『文法』の内容

次に、Ælfric の『文法』の内容を概観しよう。Gneuss が述べるように、

刊行されて130年経た現在でもZupitzaが『文法』の一般的なエディションである(Ælfric)。表2はÆlfricの『文法』の内容を示したものである(表右欄の数字はZupitzaのエディションにおけるページを示す)。

表2 Ælfric's『文法』の内容

| | |
|---|---------|
| Ælfricのラテン語版序文 | 1 |
| Ælfricの古英語版序文 | 2-3 |
| 1. 音韻論 (Speech Sound) | 4 |
| 2. 文字 (Letter) | 4-8 |
| 3. 品詞の序論 (Part of Speech: Introduction) | 8-20 |
| 4. 名詞 (Noun) | 21-91 |
| 5. 代名詞 (Pronoun) | 92-119 |
| 6. 動詞 (Verb) | 119-222 |
| 7. 副詞 (Adverb) | 222-42 |
| 8. 分詞 (Participle) | 242-57 |
| 9. 接続詞 (Conjunction) | 257-67 |
| 10. 前置詞 (Preposition) | 267-77 |
| 11. 間投詞 (Interjection) | 277-80 |
| 12. 数詞 (Names of the Numbers) | 280-89 |
| 13. 文法の下位部門 (Thirteen Divisions of the Grammar) | 289-96 |

写本にINCIPIVNT EXCERPTIONES DE ARTE GRAMMATICA ANGLICEすなわち「英語で書かれた『抜粋』が始まる」という見出しがあるように、Ælfricの『文法』の内容構成は、Priscianの『抜粋』のそれに従っていることが表1と表2の比較から分かる。Ælfricによるラテン語版と古英語版の序文の後に、音、文字、名詞、代名詞、動詞、副詞、分詞、接続詞、前置詞、間投詞、数詞、文法の下位部門が続く。古英語時代に書き写されたÆlfricの『文法』の写本は15あり、そのうち7つの写本に『文法』と共にÆlfricが編纂したGlossaryが含まれている。Glossaryは身体、職業、親族、鳥、獣、植物、木、道具などを意味するラテン語の名詞とそれに対応する古英語の名詞を列挙したものである。多くの写本でGrammarとGlossaryが共存していることは、この2つのテキストが相補う存在であることを示唆する。

4. Ælfric の翻訳手法

第2節の表1と第3節の表2を比較から、Ælfric の『文法』は構成において Priscian の『抜粋』に従っていることが分かる。しかし、2つのテキストを詳しく比較すると、ラテン語版序文で「読者がうんざりしないようにシンプルな翻訳に従った」と自ら述べているように、⁷ Ælfric はそこで提示された概念を読者が簡単に理解できるように、内容を改変していることが分かる。始めに、内容の省略の例を見よう。

(5) 内容の省略 二重母音の項目

a. *Excerptiones de Prisciano*

Sunt igitur diptongi, quibus nunc utimur, quattuor, in quibus a e o preponuntur, et sequuntur e et u, ut ‘muse’, ‘aurum’, ‘Eurus’, ‘poena’. Diptongi autem dicuntur, quod binos pthongos, hoc est uoces, comprehendunt. Et ae, quando a poetis per dieresim profertur, secundum Grecos per a et i scribitur, ut ‘aulai’, ‘pictai’ pro ‘aule’ et ‘pacte’. Corripitur sequente uocali, ut ‘Stipitibus duris agitur sudibusue preustis’. Transit in compositione in i productam ut ‘inquire’, ‘illido’, ‘occido’. Au patitur diuisionem, ut ‘gaudeo gauisus’, ‘nauta nauita’. Transit in b, ut ‘aufero abstuli’. Transit in u longa, ut ‘claudio’, ‘includo’, ‘concludo’. Eu transit in e longam ut ‘Achilles’ pro ‘Achilleus’, ‘Vlixes’ pro ‘Vlixus’, quod ostenditur ex genituo ‘Vlixei’. Oe corripitur et diuiditur sed in Grecis. Transit in u longa, ut ‘Phoenices Punices’, ‘Phoeniceon Puniceum’, ‘poena punio’. Numquam enim dyptongus presentis in preterito mutatur excepto ‘cedo cecidi’, nec desinit in duas consonantes. In x duplicem inuenitur, ut ‘fax’, ‘faux’. Ei dyptongo non utimur, excepto ‘ei’, interiectione dolentis. Nam in Grecis pro ei, e uel i productas ponimus, ut ‘Calliopeia Calliopea’,

7. scio multimodis uerba posse interpretari, sed ego simplicem interpretationem sequor fastidii uitandi causa. (Zupitza, 1)

‘Diopeian Diopea’, ‘Achilleios Achilleus’, ‘Alseios Alseus’, ‘spondeios spondeus’, ‘Neilos Nilus’.

(Porter, 54)

b. *Ælfric’s Grammar*

DYPTONGVS is twyfeald swêg oððe twyfeald stæfgefêg, and ðara synd fêowor: an on æ: *musae, poetae*; on þisum namum synd ða twegen stafas a and to ânre dyptongon getealde. oðer dyptongon ys *au: aurum* gold; þridða *eu: eurus* sùðeasterne wind; fêorða ys *oe: poena* wite, *foenum* gærs oððe strêow.

(Zupitza, 7-8)

Ælfric が内容を省略した例として二重母音の項目がある。上で示した (5) a は Priscian で (5) b が Ælfric である。Priscian が二重母音について詳しく述べているのに対して、Ælfric は 4 つの二重母音とその具体例を短く述べるに留まっている。さらに、Ælfric の『文法』を読み進めていくと、内容の省略に加えて、Priscian にはない内容の改変があることに気が付く。具体的には、彼がラテン語で書いた *Colloquy* や彼の弟子である Bata の *Colloquy* と同じく、本来の対象読者であるイングランドのベネディクト派修道会の若い見習い僧が理解しやすいように、イングランドやベネディクト派修道会になじみの深い人物や事物を用例として採用していることである。

(6) 内容の改変 イングランドの事物や修道院に関する人物の例

a. *Excerptiones de Prisciano*

Proprium est pronominis pro aliquo proprio nomine poni et certas personas cum substantia significare; non etiam qualitatem uel quantitatem siue numerum, que sunt proprie nominum.

(Porter, 58)

b. *Ælfric's Grammar*

PRONOMEN is ðæs naman speljend, sê spelað þone naman, þæt ðû ne ðurfe tuwa hine nemnan. Gif ðû cwest nû: hwâ lærde ðê? þonne cweðe ic: Dûnstan. hwâ hâdode ðê? hê mê hâdode: þonne stent se hê on his naman stede and spelað hine.

(Zupitza, 8)

(6) は、Law や Porter が指摘する有名な箇所である。Priscian を受けて Ælfric は代名詞を「名詞の代わりであり、それを使うことで名詞を 2 度繰り返す必要はない」と定義し、具体例として次の文を挙げる。「もしあなたが「誰があなたを教えたのか?」と言うなら、私は言う「ダンスタン」と。「誰があなたを序階したのか?」「彼が私を序階したのである」。『文法』の古英語版序文で触れられているように、Dunstan は 10 世紀後半 Athelwold、Oswald と共にベネディクト派修道会復興運動を主導した人物として有名である。Dunstan の名前は固有名詞について論じる箇所ですら再び例として採用されている。Dunstan の例と同じくイングランドに縁のある人名は、「父系名詞」の項目に現れる。(7) を見よう。

(7) Sume syndon PATRONOMICA, þæt synd fæderlice naman, æfter grêciscum þeawe, ac sêo lédenspræc næfð þâ naman. hî synd swâ ðeah on engliscre spræce: Penda and of ðam Pending and Pendingas, Cwicelm and of ðâm Cwicelmingas and fela ôðre.

(Zupitza, 14-5)

『抜粋』の父系名詞の項目を大幅に短縮したエルフッチは父系名詞を説明する際、「父系名詞」はラテン語にはないが英語にはあるとし、接尾

辞 *-ing* を持つ *Pending* と *Cwicelming* を用例として出す。この2つの名詞から想起されるのは『アングロ・サクソン年代記』である。パーカー年代記の648年の記事には「この年ケンウェアルフは親類のカズレッドに3000ハイドの土地を与えた。カズレッドはクウィチェルムの子である」とある。⁸ また、7年後の655年の記事では「ペンダの息子ペアダがマールシアを継承した」と記録されている。⁹ 『文法』の読者は年代記でなじみのある *Cwicelming* と *Pending* という単語を具体例として与えられることで、「父系名詞」の概念を容易に習得したことと思われる。また、Ælfric の翻訳プログラム全体の枠組みから見ると、(8) の例もまた注目に値する。

(8) *êac swylce âgene naman: Martinus, Benedictus, Augustinus ET CETERA.*

(Zupitza, 29)

この箇所はラテン語の第2曲用名詞を扱う箇所であり、ここで現れる *Martinus, Benedictus, Augustinus* という人名は *Priscian* にはなく、Ælfric が翻訳の際に導入したものである。この3人はイングランドのベネディクト派修道会に係わりの深い人物であり、*Martinus* は *Catholic Homilies Second Series* の11と39で、*Benedictus* は *Second Series* の11で、*Augustinus* は *Catholic Homilies Second Series* の10で登場する。Ælfric の『説教集』の読者でもある『文法』の読者は、用例として挙げられるこの3人の名前を見るとすぐに説教集の内容を想起したことだろう。人名に加えて、読者になじみのある地名も用例として使われている。例えば、Ælfric の『文法』では *Rome* が3回、*London* が1回、*Winchester* が1回使われている。

8. Her Cenwath gesalde Cuþrede his mæge .iii. þusendo londes be Æscesdune. Se Cuþred was Cuichelming, Cuichelm Cynegilsing. (Batley, 29)

9. 7 Pe<a>da feng to Mercna rice Penging. (Batley, 30)

5. 自国語の形成—語形変化表と用例の提示—

第1節で Ælfric の『文法』は、自国語で書かれたラテン語文法書であると同時に、結果としてアングロ・サクソン人の言語を記述したものであると述べた。Ælfric の『文法』が自国語の形成において重要な点は、Priscian にないラテン語の語形変化表を作り、それに対応する英語の翻訳を与えることで、自国語の語形変化表、活用表を読者に提供したことである。提示されたラテン語と英語の語形変化表とそれに付随する用例を参照することで、『文法』の読者はラテン語と英語の違いだけでなく、自らの母国語の形態と文法についての認識を深めたことだろう。それでは具体例を見ていこう。

表3 第1曲用男性名詞 *citharista* と古英語訳 *hearpere* (Zupitza, 21-2)

| | | |
|----------------------|---------------------|----------------------|
| <i>NOMINATIVO</i> | hic citharista | ðes hearpere |
| <i>GENITIVO</i> | huius citharistae | þises hearperes |
| <i>DATIVO</i> | huic citharistae | þisum hearpere |
| <i>ACCVSATIVO</i> | hunc citharistam | þisne hearpere |
| <i>VOCATIVO</i> | o citharista | êalá ðû hearpere |
| <i>ABLATIVO</i> | ab hoc citharista | fram ðisum hearpere |
| <i>ET PLVRALITER</i> | | and menigfealdlice |
| <i>NOMINATIVO</i> | hi citharistae | þâs hearperas |
| <i>GENITIVO</i> | horum citharistarum | ð issera hearpera |
| <i>DATIVO</i> | his citharistis | ð isum hearperum |
| <i>ACCVSATIVO</i> | hos citharistas | þâs hearperas |
| <i>VOCATIVO</i> | o citharistae | êalá gê hearperas |
| <i>ABLATIVO</i> | ab his citharistis | fram ðisum hearperum |

Ælfric はラテン語の第1曲用名詞 *cytharista* と古英語の対応語 *hearpere* の主格、属格、与格、対格、呼格、奪格を単数と複数に分類して提示する。ここで注目すべきことは、Ælfric は単に語形変化表を提示するだけでなく、格の役割を定義し、ラテン語の第3曲用名詞 *homo* と古英語訳 *mann* を使い、文における格の実際の用例を読者に示していることである。Ælfric によれば、主格とはすべての名前を言及することができる格、

属格は属性や所有を示す格、与格は利害を示す格、対格は話題の対象となる格、呼格は呼びかけをする格、奪格は誰かから何かを奪うことを意味する格である。表3で示した *cytharista* と *hearpere* 以外の名詞の語形変化表の提示は例は、以下表4からの表11に示す通りである。

表4 第1曲用女性名詞 *regina* と古英語訳 *cwēn* (Zupitza, 24)

| | | |
|----------------------|-----------------|--------------------|
| <i>NOMINATIVO</i> | haec regina | ðeos cwēn |
| <i>GENITIVO</i> | huius reginae | ðissere cwēne |
| <i>DATIVO</i> | huic reginae | ðissere cwēne |
| <i>ACCVSATIVO</i> | hanc reginam | ðās cwēne |
| <i>VOCATIVO</i> | o regina | éalā ðū cwēn |
| <i>ABLATIVO</i> | ab hac regina | fram ðissere cwēne |
| <i>ET PLVRALITER</i> | | |
| <i>NOMINATIVO</i> | hae reginae | - |
| <i>GENITIVO</i> | harum reginarum | - |
| <i>DATIVO</i> | his reginis | - |
| <i>ACCVSATIVO</i> | has reginas | - |
| <i>VOCATIVO</i> | o reginae | - |
| <i>ABLATIVO</i> | ab his reginis | - |

表5 第2曲用男性名詞 *faber* と古英語訳 *smið* (Zupitza, 26)

| | | |
|----------------------|----------------|-------------------|
| <i>NOMINATIVO</i> | hic faber | ðes smið |
| <i>GENITIVO</i> | huius fabri | þisere smiþes |
| <i>DATIVO</i> | huic fabro | þisum smiðe |
| <i>ACCVSATIVO</i> | hunc fabrum | þysne smið |
| <i>VOCATIVO</i> | o faber | éalā ðū smið |
| <i>ABLATIVO</i> | ab hoc fabro | fram ðisum smiðe |
| <i>ET PLVRALITER</i> | | |
| <i>NOMINATIVO</i> | hi fabri | ðās smiðas |
| <i>GENITIVO</i> | horum fabrorum | þissera smiða |
| <i>DATIVO</i> | his fabris | þisum smiðum |
| <i>ACCVSATIVO</i> | hos fabros | ðās smiðas |
| <i>VOCATIVO</i> | o fabri | éalā gē smiþas |
| <i>ABLATIVO</i> | ab his fabris | fram ðisum smiðum |

表 6 第 2 曲用女性名詞 *abyssus* と古英語訳 *niwelnys* (Zupitza, 30)

| | | |
|----------------------|-----------------|---------------|
| <i>NOMINATIVO</i> | haec abyssus | þeos niwelnys |
| <i>GENITIVO</i> | huius abyssi | - |
| <i>DATIVO</i> | huic abyssu | - |
| <i>ACCVSSATIVO</i> | hanc abyssum | - |
| <i>VOCATIVO</i> | o abyse | - |
| <i>ABLATIVO</i> | ab hac abyssu | - |
| <i>ET PLVRALITER</i> | | |
| <i>NOMINATIVO</i> | hae abyssi | - |
| <i>GENITIVO</i> | harum abyssorum | - |
| <i>DATIVO</i> | his abyssis | - |
| <i>ACCVSSATIVO</i> | has abyssos | - |
| <i>VOCATIVO</i> | o abyssi | - |
| <i>ABLATIVO</i> | ab his abyssis | - |

表 7 第 2 曲用中性名詞 *uerbum* と古英語訳 *word* (Zupitza, 30)

| | | |
|----------------------|----------------|-------------------|
| <i>NOMINATIVO</i> | hoc uerbum | þis word |
| <i>GENITIVO</i> | huius uerbi | þises wordes |
| <i>DATIVO</i> | huic uerbo | þisum worde |
| <i>ACCVSSATIVO</i> | hoc uerbum | ðis word |
| <i>VOCATIVO</i> | o uerbum | êalá ðû word |
| <i>ABLATIVO</i> | ab hoc uerbo | fram þisum worde |
| <i>ET PLVRALITER</i> | | |
| <i>NOMINATIVO</i> | haec uerba | þas word |
| <i>GENITIVO</i> | horum uerborum | þissera worda |
| <i>DATIVO</i> | his uerbis | ðisum wordum |
| <i>ACCVSSATIVO</i> | haec uerba | þas word |
| <i>VOCATIVO</i> | o uerba | êalá gê word |
| <i>ABLATIVO</i> | ab his uerbis | fram ðisum wordum |

表 8 第 3 曲用男性名詞 *poema* と古英語訳 *leoðcræft* (Zupitza, 33)

| | | |
|---------------------|-------------------|-------------------------|
| <i>NOMINATIVO</i> | hoc poema | ðes léo ðcræft |
| <i>GENITIVO</i> | huius poematis | ðises léo ðcræftes |
| <i>DATIVO</i> | huic poemati | ðisum léo ðcræfte |
| <i>ACCVSATIVO</i> | hoc poema | þisne léo ðcræft |
| <i>VOCATIVO</i> | o poema | êalâ ðû léo ðcræft |
| <i>ABLATIVO</i> | ab hoc poemate | fram ðisum léo ðcræfte |
| <i>ET PLVRLITER</i> | | |
| <i>NOMINATIVO</i> | haec poemata | ðas léo ðcræftas |
| <i>GENITIVO</i> | horum poematum | ðissera léo ðcræfta |
| <i>DATIVO</i> | his poematibus | ðisum léo ðcræftum |
| <i>ACCVSATIVO</i> | haec poemata | ðas léo ðcræftas |
| <i>VOCATIVO</i> | o poemata | êalâ gê léo ðcræftas |
| <i>ABLATIVO</i> | ab his poematibus | fram disum léo ðcræftum |

表 9 第 4 曲用男性名詞 *sensus* と古英語訳 *andgyt* (Zupitza, 78)

| | | |
|---------------------|-----------------|---------------------|
| <i>NOMINATIVO</i> | hic sensus | þis andgyt |
| <i>GENITIVO</i> | huius sensus | ðises andgytes |
| <i>DATIVO</i> | huic sensui | þisum andgyte |
| <i>ACCVSATIVO</i> | hunc sensum | þis andgyt |
| <i>VOCATIVO</i> | o sensus | êalâ ðû andgyt |
| <i>ABLATIVO</i> | ab hoc sensu | fram ðisum andgyte |
| <i>ET PLVRLITER</i> | | |
| <i>NOMINATIVO</i> | hi sensus | ðâs andgytu |
| <i>GENITIVO</i> | horum sensuum | ðissera andgyta |
| <i>DATIVO</i> | his sensibus | þisum andgytum |
| <i>ACCVSATIVO</i> | hos sensu | þâs andgytu |
| <i>VOCATIVO</i> | o sensus | êalâ gê andgytu |
| <i>ABLATIVO</i> | ab his sensibus | fram ðisum andgytum |

表 10 第 4 曲用女性名詞 *manus* と古英語訳 *hand* (Zupitza, 79)

| | | |
|----------------------|----------------|-----------|
| <i>NOMINATIVO</i> | haec manus | þeos hand |
| <i>GENITIVO</i> | huius manus | - |
| <i>DATIVO</i> | huic manui | - |
| <i>ACCVSSATIVO</i> | hanc manum | - |
| <i>VOCATIVO</i> | o manus | - |
| <i>ABLATIVO</i> | ab hac manu | - |
| <i>ET PLVRALITER</i> | | |
| <i>NOMINATIVO</i> | hae manus | - |
| <i>GENITIVO</i> | harum mannum | - |
| <i>DATIVO</i> | his manibus | - |
| <i>ACCVSSATIVO</i> | has manus | - |
| <i>VOCATIVO</i> | o manus | - |
| <i>ABLATIVO</i> | ab his manibus | - |

表 11 第 5 曲用男性名詞 *dies* と古英語訳 *dæg* (Zupitza, 81-2)

| | | |
|----------------------|--------------------------|------------------|
| <i>NOMINATIVO</i> | hic VEL haec dies | ðes dæg |
| <i>GENITIVO</i> | huius diei | þises dæges |
| <i>DATIVO</i> | huic diei | ðisum dæg |
| <i>ACCVSSATIVO</i> | hunc VEL hanc diem | þisne dæg |
| <i>VOCATIVO</i> | o dies | êalá ðû dæg |
| <i>ABLATIVO</i> | ab hoc VEL ab hac die | fram ðisum dæge |
| <i>ET PLVRALITER</i> | | |
| <i>NOMINATIVO</i> | hi dies | þás dagas |
| <i>GENITIVO</i> | horum dierum | þissera daga |
| <i>DATIVO</i> | his diebus | ðisum dagum |
| <i>ACCVSSATIVO</i> | hos dies | þás dagas |
| <i>VOCATIVO</i> | o dies | êalá gê dagas |
| <i>ABLATIVO</i> | ab his diebus | fram ðisum dagum |

語形変化表と用例の提示は、名詞に準ずる代名詞でも見られる。Priscian の『抜粋』第 3 章 13 節では、1 人称代名詞の格変化がごく簡単に提示されているだけだが、Ælfric の『文法』では、代名詞を、類型、人称、性、構成、数、格の 6 つの範疇ごとに分類し、語形変化表とその用例を詳細に示している。例えば、表 12 は Zupitza の 94 ページにある 1 人称代名

詞の語形変化表である。1人称代名詞を数と格に応じて分類し変化表を提示した後、*swutelicor* (より明らかに) という副詞と共に、具体例を読者に提示する。

表 12 1人称代名詞の語形変化表 (Zupitza, 94-5)

| | | |
|--------------------|--------------------|---------|
| <i>NOMINATIVO</i> | ego | ic |
| <i>GENITIVO</i> | mei VEL mis | mín |
| <i>DATIVO</i> | mihi | mê |
| <i>ACCVSSATIVO</i> | me | mê |
| <i>ABLATIVO</i> | a me | fram mê |
| <i>NOMINATIVO</i> | nos | wê |
| <i>GENITIVO</i> | nostrum VEL nostri | ûre |
| <i>DATIVO</i> | nobis | ûs |
| <i>ACCVSSATIVO</i> | nos | ûs |
| <i>ABLATIVO</i> | a nobis | fram ûs |

ところで、Ælfric は Zupitza の 11 ページにある品詞についての序論で「8つの品詞のうちで、名詞と動詞が最も偉大で力強く、名詞ですべての事物を言及し、動詞ですべての事物について語ることができる」と述べている。名詞、代名詞に加えて、動詞の活用表の提示もまた Priscian にはない Ælfric の『文法』の特徴とすることができる。動詞についての序論で、態、時制、法、人称、数の文法範疇について簡単な説明をした後、Ælfric はラテン語の活用に基づいて動詞を記述する。その際、それぞれの活用から代表的な動詞の活用表を網羅的に提示する。第1活用動詞からは「愛する」を意味するラテン語の *amo* と古英語訳 *lufian*、第2活用動詞からは「教える」を意味するラテン語の *doceo* と古英語訳 *tæcan*、第3活用動詞からは「読む」を意味するラテン語の *lego* と古英語訳 *rædan*、第4活用動詞からは「聞く」を意味するラテン語の *audio* と古英語訳 *hyran* である。この4つの動詞に加えて、変異動詞の *fero*、*volo*、*edo*、*eo*、*sum* とその古英語訳も活用表として提示する。具体例として「愛する」を意味する第1活用動詞の *amo* とその古英語訳 *lufian* を見よ

う。以下の表 13 から表 30 まだが Ælfric によるラテン語の動詞 *amo* と古英語訳 *lufian* の能動態の活用表である。

表 13 直説法現在 (Indicative Present) (Zupitza, 130)

| | | | |
|-------------|-----------|---------------|-----------|
| <i>amo</i> | ic lufige | <i>amamus</i> | wê lufjað |
| <i>amas</i> | ðû lufast | <i>amatis</i> | gê lufjað |
| <i>amat</i> | hê lufaþ | <i>amant</i> | hî lufjað |

表 14 直説法未完了 (Indicative Imperfect) (Zupitza, 130)

| | | | |
|---------------|-------------|-----------------|------------|
| <i>amabam</i> | ic lufode | <i>amabamus</i> | wê lufodon |
| <i>amabas</i> | ðû lufodest | <i>amabatis</i> | gê lufodon |
| <i>amabat</i> | hê lufode | <i>amabant</i> | hî lufodon |

表 15 直説法完了 (Indicative Perfect) (Zupitza, 130)

| | | | |
|-----------------|----------------------------|--|------------|
| <i>amaui</i> | ic lufode fulfremedlice | <i>amauimus</i> | wê lufodon |
| <i>amauisti</i> | þû lufodest | <i>amauistis</i> | gê lufodon |
| <i>amauit</i> | hê lufode | <i>amauerunt</i> <i>VEL amauere</i> | hî lufodon |

表 16 直説法過去完了 (Indicative Pluperfect) (Zupitza, 131)

| | | | |
|-----------------|------------------|-------------------|------------|
| <i>amaueram</i> | ic lufode gefyrn | <i>amaueramus</i> | wê lufodon |
| <i>amaueras</i> | ðû lufodest | <i>amaueratis</i> | gê lufodon |
| <i>amauerat</i> | hê lufode | <i>amauerant</i> | hî lufodon |

表 17 直説法未来 (Indicative Future) (Zupitza, 131)

| | | | |
|---------------|--|-----------------|-----------|
| <i>amabo</i> | ic lufige gyt tō dæg oððe tō merjen | <i>amabimus</i> | wê lufjað |
| <i>amabis</i> | þû lufast | <i>amabitis</i> | gê lufjað |
| <i>amabit</i> | hê lufað | <i>amabunt</i> | hî lufjað |

表 18 命令法現在 (Imperative Present) (Zupitza, 131)

| | | | |
|-------------|-----------|---------------|-----------|
| - | - | <i>amemus</i> | lufjon wê |
| <i>ama</i> | lufa ðû | <i>amate</i> | lufjge gê |
| <i>amet</i> | lufige hê | <i>ament</i> | lufjon hî |

表 19 命令法未来 (Imperative Future) (Zupitza, 131)

| | | | |
|-------------------|-------------|----------------|-----------|
| - | - | <i>amemus</i> | lufige wê |
| <i>amato tu</i> | lufa ðû gyt | <i>amatote</i> | lufige gê |
| <i>amato ille</i> | lufige hê | <i>amanto</i> | lufjon hî |

表 20 希求法現在 + 未完了(Optative Present + Imperfect)(Zupitza, 131-2)

| | | | |
|----------------------|----------------------------------|------------------------|---------------------|
| <i>utinam amarem</i> | êalâ gif ic lufode nû oððe ær | <i>utinam amaremus</i> | êalâ gif wê lufodon |
| <i>utinam amares</i> | êalâ gif ðû lufodest | <i>utinam amaretis</i> | êalâ gif gê lufodon |
| <i>utinam amaret</i> | êalâ gif hê lufode | <i>utinam amarent</i> | êalâ gif hî lufodon |

表 21 希求法完了 + 過去完了(Optative Perfect + Pluperfect)(Zupitza, 132)

| | | | |
|-------------------------|--|---------------------------|---------------------|
| <i>utinam amauissem</i> | êalâ gif ic lufode fulfremedlice oððe gefyrn | <i>utinam amauissemus</i> | êalâ gif wê lufodon |
| <i>utinam amauisses</i> | êalâ gif ðû lufodest | <i>utinam amauissemus</i> | êalâ gif gê lufodon |
| <i>utinam amauisset</i> | êalâ gif hê lufode | <i>utinam amauissent</i> | êalâ gif hî lufodon |

表 22 希求法未来 (Optative Future) (Zupitza, 132)

| | | | |
|--------------------|-----------------------------------|----------------------|-----------------------------------|
| <i>utinam amem</i> | forgife god, þæt ic lufige gyt | <i>utinam amemus</i> | forgyfe god, þæt wê lufjon gyt |
| <i>utinam ames</i> | þæt ðû lufige | <i>ametis</i> | þæt gê lufjon |
| <i>amet</i> | þæt hê lufige | <i>ament</i> | þæt hî lufjon |

表 23 接続法現在 (Subjunctive Present) (Zupitza, 132)

| | | | |
|-----------------|--------------------|-------------------|--------------------|
| <i>cum amem</i> | þonne ic nû lufige | <i>cum amemus</i> | ðonne wê nû lufjað |
| <i>cum ames</i> | þonne ðû lufast | <i>cum ametis</i> | þonne gê lufjað |
| <i>cum amet</i> | þonne hê lufað | <i>cum ament</i> | þonne hî lufjað |

表 24 接続法未完了 (Subjunctive Imperfect) (Zupitza, 132-3)

| | | | |
|-------------------|-------------------------------|---------------------|------------------|
| <i>cum amarem</i> | þâ ðâ ic lufode hwæt hwega | <i>cum amaremus</i> | þâ ðâ wê lufodon |
| <i>cum amares</i> | ðâ ðâ ðû lufodest | <i>cum amaretis</i> | þâ þâ gê lufodon |
| <i>cum amaret</i> | þâ ðâ hê lufode | <i>cum amarent</i> | þâ ðâ hî lufodon |

表 25 接続法完了 (Subjunctive Perfect) (Zupitza, 133)

| | | | |
|---------------------|----------------------------------|-----------------------|------------------|
| <i>cum amauerim</i> | þá ðá ic lufode fulfremedlice | <i>cum amauerimus</i> | þá ðá wê lufodon |
| <i>amaueris</i> | þá ðá ðú lufodest | <i>amaueritis</i> | þá ðá gê lufodon |
| <i>amauerit</i> | þá ðá hê lufode | <i>amauerint</i> | ðá ðá hî lufodon |

表 26 接続法過去完了 (Subjunctive Pluperfect) (Zupitza, 133)

| | | | |
|----------------------|------------------------|------------------------|------------------|
| <i>cum amauissem</i> | þá ðá ic lufode gefyrn | <i>cum amauissemus</i> | þá ðá wê lufodon |
| <i>amauisses</i> | þá ðá ðú lufodest | <i>amauissetis</i> | þá ðá gê lufedon |
| <i>amauisset</i> | þá ðá hê lufode | <i>amauissent</i> | ðá ðá hî lufedon |

表 27 接続法未来 (Subjunctive Future) (Zupitza, 133-4)

| | | | |
|---------------------|---------------------|------------------------|------------------------|
| <i>cum amauero</i> | þonne ic lufige gyt | <i>cum amauissemus</i> | þonne wê lufjað gyt |
| <i>cum amaueris</i> | þonne þú lufast gyt | <i>amaueritis</i> | ðone gê lufjað gyt |
| <i>cum amauerit</i> | ðonne hê lufað gyt | <i>amauerint</i> | þonne hî lufjað gyt |

表 28 不定形 (Zupitza, 134)

現在 + 未完了
完了 + 過去完了
未来

| | |
|--|--------|
| <i>amare</i> | lufjan |
| <i>amasse</i> VEL <i>amauisse</i> | lufjan |
| <i>amatum ire</i> VEL <i>amaturum esse</i> | lufjan |

表 29 分詞 (Zupitza, 134-5)

| | |
|----------------|--------------|
| <i>amandi</i> | to lufigenne |
| <i>amando</i> | lufigende |
| <i>amandum</i> | to lufigenne |
| <i>amatum</i> | |
| <i>amatu</i> | mid lufe |

表 30 受動態直説法現在 (Zupitza, 139)

| | | | |
|---------------|-----------------|----------------|------------------|
| <i>AMOR</i> | ic eom gelufod | <i>amamur</i> | wê synt gelufode |
| <i>amaris</i> | þú eart gelufod | <i>amamini</i> | gê synd |
| <i>amatur</i> | hê ys gelufod | <i>amantur</i> | hî synd |

能動態の活用表の後には、表 30 のように受動態が続く。受動態における活用表の配置は、能動態と同じく法と時制に応じて行われる。興味深いことに、Ælfric は Zupitza の 158 ページにある第 2 活用動詞 *doceo* と古英語訳 *tæcan* の受動態の直説法現在を示した直後に、「英語では以下他と同じように続く」と述べ、活用表の提示はラテン語だけにとどめ、英語の対応語を記すことは一部の例外を除いて止めてしまう。第 3 節で見たように、動詞の後には、副詞、分詞、接続詞、前置詞、間投詞、数詞の記述が続く。

6. 結び

数詞の記述が終わった後、Ælfric は古英語版序文を想起させることばを述べる。

(8) GRAMMA on græcisc is LITTERA on lēden and on englisc stæf, and GRAMMATICA is stæfcræft. Se cræft geopenað and gehylt lēdenspræce, and nân man næf ð lēdenbōca andgit befullon, būton hē þone cræft cunne. se cræft is ealra bōclicra cræfta ordfruma and grundweall. GRAMMATICVS is, sê ðe can ðone cræft grammican befullan.

(Zupitza, 289)

「ギリシア語のグラマは、ラテン語ではリテラであり、英語ではステフである。そしてグラマティカとはステフクラフト（文法）である。その学芸はことばを開き、保持するものである。その学芸を知らなければ、誰もことばの意味を十分保つことはない。その学芸はすべての書物に係わる知識の始まりであり基礎である。文法を知る人は「グラマティカス」である」。Howlett や Glair によれば、*grammaticus* とは言語の専門家、学者、文法家を指す単語である。Priscian の『抜粋』を下敷きにし、当時

の知的文脈にふさわしいラテン語を書き、それに対応する英語を付け加えることで、ラテン語文法に裏付けられた自国語の文法を確立し、ラテン語と英語の文法を読者に認識させ、Æthelwold が Ælfric にしたように、彼らをラテン語、英語双方の *grammaticus* として教育すること。この目的を達成するために、Ælfric は直訳ではない自らの手による『文法』を書き上げたのかもしれない。

参考文献

- Baker, Peter S. and Lapidge, Michael, eds. *Byrhtferth's Enchiridion*, EETS s.s. 15. Oxford: Oxford University Press, 1995.
- Bately, Janet. M., ed. *The Anglo-Saxon Chronicle: A Collaborative Edition. Vol. 3: MS. A*. Cambridge: D.S. Brewer, 1986.
- Cameron, Angus, 'A List of Old English Text' in Roberta Frank ed. *A Plan for the Dictionary of Old English*. Toronto: University of Toronto Press, 1973 pp. 25-306.
- Clemons, Peter, ed. *Ælfric's Catholic Homilies: The First Series, Text*. EETS s.s. 17. Oxford: Oxford University Press, 1997.
- Crawford, S.J., ed. *The Old English Version of the Heptateuch: Ælfric's Treatise of the Old and New Testament and his Preface to Genesis. repr. with additions by N.R. Ker*. EETS o.s. 160. London: Oxford University Press, 1969.
- Garmonsway, G. N., ed. *Ælfric's Colloquy* Second Edition. London: Methuen & Co. Ltd., 1947.
- Gawara, Scott ed., *Anglo-Saxon Conversations: The Colloquies of Ælfric Bata*, translated with an introduction by David W. Porter. Woodbridge: The Boydell Press, 1997.
- Glair, P. G. W., ed. *Oxford Latin Dictionary*. Oxford: Clarendon Press, 1982.
- Gneuss, Helmut, *Handlist of Anglo-Saxon Manuscripts: a List of Manuscripts and Manuscript Fragments Written or Owned in England up to 1100*. Tempe: Arizona Center for Medieval and Renaissance Studies, 2001.
- Gneuss, Helmut, *Ælfric of Eynsham: His Life, Times and Writings*. Old English Newsletter Subsidia 34. Kalamazoo: Western Michigan University, 2009.
- Godden, Malcom, ed. *Ælfric's Catholic Homilies: The Second Series, Text*. EETS s.s. 5. Oxford: Oxford University Press, 1979.
- Howlett, D. R., prepared. *Dictionary of Medieval Latin from British Sources: Fascicule IV F-G-H*. with the assistance of A.H. Powell, R. Sharpe and P.R. Staniforth. Oxford: Oxford University Press, 2008.
- Kastovsky, Dieter. 'Translation Techniques in the Terminology of Ælfric's Grammar' In Merja Kytö, John Scahill and Harumi Tanabe eds. *Language Change and Variation from Old English to Late Modern English: a Festschrift for Minoji Akimoto*. Bern: Peter Lang, 2010.

- pp. 163-74.
- Law, Vivien, 'Ælfric's Excerptiones de art grammatica anglie' *Histoire Epistemologie Langage* IX-1 (1987): 47-71.
- MacLean, G.B., 'Ælfric's Version of Alcuini interrogationes Sigeuulfi in Genesis, *Anglia* 7 (1884): 1-59.
- Menzer, M., 'Ælfric's Grammar: Solving the Problem of the English-Language Text', *Neophilologus* 83 (1999): 637-52.
- Porter, David W., ed. *Excerptiones de Prisciano: the Source for Ælfric's Latin-Old English Grammar*. Cambridge: D.S. Brewer, 2002.
- Skeat, Walter. W., ed. *Ælfric's Lives of Saints*, 4 vols., EETS 76, 82, 94, 114, London: N. Trübner & Co., 1881-190.
- Wilcox, Jonathan. ed. *Ælfric's Preface*. Durham Medieval Texts, Number 9. Durham: Department of English Studies, University of Durham, 1994.
- Williams, Edna Rees, 'Ælfric's Grammatical Terminology.' *PMLA* 73/5 (1958): 453-62.
- Zupitza, Julius, ed. *Ælfrics Grammatik und Glossar: Erste Abteilung: Text und Varianten*, Berlin: Weidmannsche Buchhandlung, 1880.